支　部　便　り

平成22年4月みつわ会東北支部

名残雪川面にとけて瀬を速め　　圭舟

今年の春先は例年より寒い日が多いように感じます。環境が少し変わってきて、気温だけではなく、雪も雨も風も以前とどこか違うのです。変わらないのは、毎年確実に歳をとることでしょうか。それでもまた春になりました。

――― 3月の幹事会の内容 ―――

① 役員の任期

原則、支部長は2年交代ですが、なかなか交代要員の挙手がありません。マンションの役員や町内会の役員の場合と同じ様に、何処の世界でもなかなか。いずれは後進が継承することになるのですが、自発的に楽しみながら引き受けて頂きたいものです。

幹事については健康上の理由等で若干の入れ替えをした上、役割分担を含め、これは大して騒動も無く治まりました。これもロングセラーで、あまり感心出来ることではありませんが、今度もまた平穏で波風が立たなければ良としますか。

② 22年度支部総会

5月中旬を予定してはいますが、昨年会場だった仙台ホテルが店じまいをしたので、また新たに探すことになり、予約の関係等で日程が変わる場合も想定されます。

――― 4月の行事 ―――

	支　部	みちのく損保
4月　7日（水）	※幹事会　3時みつわコーナー	
16日（金）		三役：幹事会3時～
20日（火）		「奥の細道」
23日（金）		第93回ゴルフ　松島チサン

※幹事各位

・（ご注意）今回は第1水曜日です。
・議題：支部総会準備1回目（議案、役割分担、会場、開催日、アトラクション、案内等）
・段取り等余裕無き状況なれば、万障繰り合わせの上ご出席願い上げ度存じ奉り上げ候。
・「便り」プリント用インク代当日支払います。

※会員の皆様へ

・例年の様に、総会出欠ハガキの投函アロアンスが短くなる場合がありますので、ご容赦下さい。

――― 会社の人事 ―――

高橋東北損（サ）部長 ―――→ 首損1部推進役

三十一文字にどっぷり　仙台　千葉繁明

「こんな筈ではなかったぞ」と云いつつも、十年近くも短歌を作り続けている。しかもこの頃は、歌評や新年歌会の司会まで引き受けているのであるから、まさにどっぷりと三十一文字に浸かっているのである。

私が短歌というものを生まれて初めて作った思い出は忘れられない。前職の同期の仲間達と九州柳川に集い、定年後の心境等を話し合いながら名物の「どんこ舟」に揺られて柳川めぐりを楽しんだことがあった。そこで「ふっと」浮かんだのが

「侘びしくも川辺にそよぐ花菖蒲
　　柳川めぐりつ老いを語ろう」

という三十一文字で指を折っては何とか五七五七七に纏めたので、これが短歌なのかと思いつつ手帳に書き留めて置いたのである。

「柳川は城を三めぐり七めぐり
　　水巡らしぬ咲く花菖蒲」

北原白秋の故郷である柳川はまさしく大正時代にタイムスリップしたような静かな佇まいで、それだけでも感激なのに、川面に揺られて、うっとりしている目の前に岸辺にそよぐ花菖蒲が目に入ってきたのである。「水郷柳川は我が心のふるさと」と歌った北原白秋の世界がそのまま飛び込んできたのであるから私の感性が思わずこんな歌を詠んだのであろう。しかし、今、この歌を読み返してみると、読者を無視した全くひとりよがりの歌で恥ずかしい限りである。推敲して見た。

“柳川の掘割進む「どんこ舟」
　　ゆらりゆられて友と語ろう”

“柳川の岸辺にそよぐ花菖蒲
　　この静けさに白秋偲びぬ”

いつも行く馴染みの店でこんな柳川の旅をポツリと話した事があった。ところがこの店の主も、柳川を訪れ歌を詠んでいたというではないか。「山麓」の歌人で筑前琵琶奏者の高橋雛子さんである。

思いがけない偶然から、「山麓」という貴重な発信場所を知るきっかけとなり、私の残りの人生に限りなく広くそしてかけがえの無い楽しみを教えてくれることになったのである。

縁というものは不思議なものである。ある日この店に、台湾ケーブルテレビのスタッフが取材に来た事があった。丁度居合わせた私にリポーターが日本古来の伝統について問いかけてきたので和歌の話しをしたところとても関心を示した。是非短歌を紹介して欲しいという事になり、たまたま持ち合わせていた原稿から何首かの短歌を読み上げカメラに収めていったのである。何と、この番組はロンドン、パリ、ニューヨークで放映され私の短歌が各国に流れたのであるから面白い話である。

私は人とのふれあいは大切にしたいと思っている。そんな私に爽やかな想い出を残した友がいる。静かに酒を呑むのが好きな私と「うま」が合った彼とは、いつも音楽の話、旅の話し等をしては楽しい酒を飲んでいた。彼は、焼き鳥と酒が美味しく店内にはいつも美しい旋律が店に流れているそんな店を作っていたのである。ある晩、彼の店を訪れ楽しいひとときを過ごしたのは云うまでもない。合唱団でコーラスを歌っていた彼は店内に自分の好きな十七世紀のバロック音楽を流し店を癒していたのである。すっかり好い気持ちになって店を出ると、夜風がとても心地良く見上げた空には朧月が浮かんでいた。店の看板には、北極星とそれを取り巻くアンドロメダ銀河星座が描かれているではないか。彼の作品にはロマンが満ち溢れているのである。スイスからの絵葉書に小さく「さようなら」と書かれた便りが来て間もなく、彼は病で天国へ旅立って逝きもういない。

バロックと酒とロマンに酔いしれて
　　逝き友想う朧月かな　繁明

（続４）理事長さんの日記　　加藤徹三

１月１日（金）　お正月

水漏れも無い、火災報知機の誤作動も無い静かな元旦。大きくなった孫たちは、それぞれの予定があり、遠隔地に住む小さい孫一家も高速道路が安いとはいえ、短い休暇では出かける気にもならないとみえて、二人だけの贅沢と言えなくもないお正月を迎えた。

管理人は休暇中だから呼び出しのチャイムもないし、午前中に初詣を澄ませ、あとは炬燵に入ったり出たり。連休中には、来客の駐車車両が込み合うので、軽微な揉め事もあるが、敷地内とはいえ、当事者（大人だべや！）同士のことだから管理者が出る幕ではない。

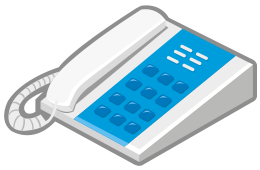
１月２０日（水）なごみ食堂

１月は移動理事会などと名付けたものの、早い話が新年会。３０００円飲み放題の「なごみ御膳」というコースで、自己負担１０００円、あとは運営費で賄う。理事の大半は現役なので、午後７時まで会場に直行される様にと案内をしておいたら、いつも定刻に遅れる忙しい銀行員の佐藤監事や、これも課長職で帰りが遅く欠席になりがちの高川理事他、全員定時までに合体。二人のご隠居副理事長殿は、早々と駆けつけてお茶をすすっていた。

会議なので議題があって然るべきところ、挨拶が終わると急に意欲が失せて、先ずは乾杯、となってしまった。それでも舌が回り始めると、それぞれの本音や、むしろ真面目な意見が出たりして、やはり“飲ミュニケーション”は重宝なものだ。

議事録を掲示板に貼らなければならないので、一応は恰好のつくものを考えなければならなくなった。

１月２７日（水）　新人の失敗



東北管連に来て１ケ月になる。今日は初めての当番。鳴る電話に出たが、“何方様”かよく聞えない。三度聞き直したら「もういい！」と怒鳴られて電話を切られた。こういう場合は先に要件を聞いてから、だった！下り気味の遮断機に呼応して、勘も咄嗟には起き上がらない。

ここでは当番以外は任意出勤なので、午後から用事のある役員だけが、一人、二人ポツリポツリと出勤してくる。

工事関係の訪問者があり、デスクがガラ空なので「その辺にどうぞ」と案内したのだが、あとで浅野副会長から「客は応接セットで応対しろ。デスクの書類に近づけるな！」と窘（たしな）められた。70 歳を過ぎてからまで俗事で人から叱責されたくないワ、という気持ちと、俺はまだ現役として世間と繋がっているのだ、という誇りの様なものが入り混じる。

毎週月曜日の運営委員会の席上、当番日の出来事を報告する際に、二つの失敗談を披露して笑い話に終わったが、いつの間にか電話が“老人モード”に変わって音声が最大にセットされ、デスクの上にあった書類が一目少なくなった。だが「どうだ、お陰でいくらか仕事場が改善されただろう」と、負け惜しみを言う程威張れたケースではないのが悔しい。